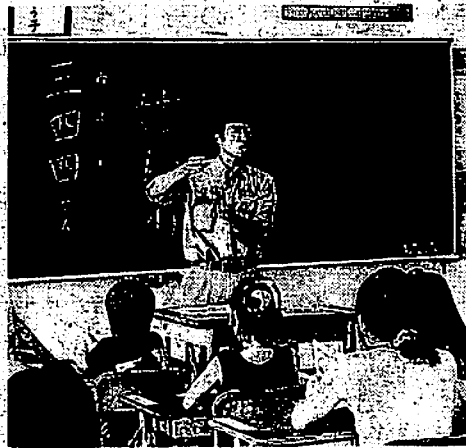


# 給食残飯再生堆肥で野菜を

給食の残飯で「リサイクル堆肥」を作り、野菜を育てる取り組みが、知多市立佐布里小学校で行われる。指導するのは、廃棄物処理業の三四四（=みよし、本社知多市にし台4の19の13、千賀貴彦社長、電話0562・55・9050）。農業生産法人を立ち上げ、7年前に農業に参入。野菜くずなどを元にリサイクル堆肥を作る技術を子どもたちに伝えようと、17日、社長自ら教壇に上がった。

(知多)

## 三四四が知多・佐布里小で指導



教壇に上がり堆肥ができる説明をする千賀さん

7年前に農業生産法人設立 培った技術を伝授

「残った給食や果物の皮に、堆肥やもみ殻、土になる」。思いがおかすを混ぜると、思いの答えが飛ぶ。どうなる?」。佐布里小4年生の教室で、千賀あるものはいつか死に賀さんが児童に質問します。すると他の生き



給食の残飯で堆肥作り 佐布里小4年生の児童

物が食べたりして、み組むタイコン栽培に生んな土に返るんだよ。かす。「食べ物の大切る過程を、子ども目線循環の法則を知ってほで解説する。同社が「地域貢献」子を持つ父親の千賀さんとして、野菜栽培の指んは願う。導を始めたのは3年4年生の76人は同校前。佐布里小も総合学の菜園に向かい、2日習の二環として受け入分の給食の残飯約60kgれた。今年さらには踏に堆肥やもみ殻、水なみ込み、給食の残飯をどを混ぜ込んだ。途中使った堆肥作りを教から手作業を始めた見え、児童が秋から取り童たちは「にゆると

してる!」なんか気持ちいい!と歓声を上げた。9月中旬には完熟した堆肥をまいた畑でタイコン栽培を始め、11月中旬ごろの収穫を見込んでいる。豊かではあるが、食糧自給率は低い日本。農業、資源循環、命の大切さ。次世代を担う子どもたちにとって伝えるか、の取り組みが、各方面で試みられている。「見て触って理解して、栽培して、収穫できる。この達成感はずももたちには魅力的でしょう」と、4年2組担任の石原孝啓教諭は児童を見守る。「楽しかった!」と目を輝かせる子どもたちの表情に、大人たちの試行錯誤が報われる。